

## 『遠野物語』拾遺二話

粕谷 隆夫  
かすや たかお

鏡石、佐々木喜善なくして『遠野物語』は誕生しなかった。かれはふるさとの遠野土淵村の村長をやったが、民話や口承文学を収集する心根と、公務を処理する役人の気持ちと、相反するベクトルの生活に疲労しなかったか。かれは満四六歳で母親よりはやく亡くなったが、常よりその母は咳いていた。「国男先生に出会わなければよかったのだ。昔話などを集めて、男子たるもの実学をやってから、遊べ。ふん、旧家のかまどをひっくり返して、なぜこのガガ（母）が仙台市に住んでいるのだ。わからん。遠野で死にたいものだ」この母堂は文字に残してはいないが、伝え聞くと洒落た言葉を残している。「悲

劇、ずいぶんと大げさな言葉ですね。悲しみで十分です。しかし不幸の悲しみを知悉しないと、幸せの感触が判らないとは、人の生とは不思議なものです。でもひと言でいえば、時は人を待たず、黄梁一炊の夢だ」

息子の収集した記録の宝庫は、彼女の辣腕で灰燼に帰したが、遠い親戚の人が偶然手元に残していた小話二話が発見され、『カッパ通信』に載ったので再録する。

平助の家は六角牛神社の近くにあり。秋も深まったある日、親戚の法事を終え、笛吹峠を越えた時分にはとつぷりと日は

暮れ、闇が深くなってきていた。「風が無くてええ。死助権現さまに手を合わせていくべきだったかな」当時としては珍しく油絵に熱心だった平助は、前方の闇をどう描くかぼんやり考えながら歩をすずめていた。ふくろうの声がおくで響いている。

と、まっすぐな一本道の果てにポツンとあかりが見えた。「提灯か。しかしこの時間に笛吹峠に向かうとはよほどの事か。でも提灯は揺れていないな」だんだんと相手の影が濃くなってきた。「おぼんです」と平助は提灯を顔の高さまで上げた。相手は無言で明かりを自分の顔の横に並べ



死助権現

た。平助の背中に氷の板が張り付いた。それは自分自身だった。鏡か。いや自分の顔だった。ただ眼だけが違った。あのモデリアニの人物画の眼。ひとみが無い。黒い穴。相手は唇だけで笑った。背中の氷板がザツと流れた。

走った。足が出ない。後ろから相手の腕だけが伸びてくる気配を感じる。息を止めながら走りに走る。児を喚ぶ女の金切声、迷子の迷子の平助やゝい、かアごめかごめ。幻聴か。

自宅がある村の入口に着いた。道祖神の石の頭に片手をつき、息をゆっくり整える。目がかすんでいたが、それでも安どの息がでる。提灯は本体が飛び散り、棒だけ手元に残っていた。「あれは何だったんだ」自宅は村の中ほどにあり、平助はトボトボ歩き始めた。汗が急にひき、悪寒が走る。帰ったら熱い五右衛門風呂に入って一杯ひっかけよう。風はない。鎮守の森がなぜか薄明るく、大木を伐り倒す音、歌の声、女の叫び声が聞こえる。村の衆はなぜ出てこない。あと一町だ。一步一步が苦しい。肩に石が、足首に石

が取り付き、それがだんだん重くなってくる。家の戸口で四つん這いになり、片手をあげる。

「あなた！」と叫ぶ女房の音がぼんやりした頭の中に響いた。

平助は老人になっていた。髪はすべて白くなり、ほとんど抜け落ちていた。三日後には歯がすべて抜け、その翌日死んだ。(原文では老人はその日失せたりとなっている)

次郎は上郷村に住み、駄賃(運送)を生業とせり。数頭の馬の背に野菜・炭などを積んで釜石へ行き、帰路魚を持ってくる。この釜石街道の中ほどに仙人峠あり。仙人峠は登り十五里降り十五里あり(坂東道計算で一里が五丁六丁)。彼は笛の名人で、路々ところが鬱すると笛を吹いた。そうすると昼間は鳥や動物が近づき同道し、夜はふくろうが低く応えた。

早稲まさに熟し晩稲は花盛りの晩夏、釜石での魚の調達に時をそがれ、その日は夜半過ぎに自宅に着くはめになっ

た。家は薄暗かったが、いつもよりランプがひとつ多かった。馬を納屋につなぎ、三和土に入り「なぜランプが」とつぶやいた時、ふたつの影がこちらを見ていた。次郎は仰天した。女房がふたりいる。

ふたりは必死に次郎を凝視している。固唾をのみしばらくは沈黙が支配していたが、十秒後、甲高い悲鳴に近い声で同時に「あなた」「あなた」が響いた。ふたりの女房は脱兎のごとく次郎の片腕をそれぞれつかみ、あらん限りの力で引っ張りあつた。次郎はうめいた。腕が千切れそうだ。懐から銭が飛び散った。ひとりの女房が腕を離れた。もうひとりの女房は逆に次郎の首まで細腕をまわし締め上げてきた。『こんな細腕でこんな力をだす女は俺のかかあではないぞ』と直感し、離された片腕で肘鉄を女にあてた。女は悲鳴をあげてうしろに倒れた。「化け物め。おまえはニセモノのかかあだ」次郎は足で蹴った。「出ていけ」女は痛切な悲鳴をあげた。「あなた」と叫んでいたが、次郎は女を追い出し、入口に門をかけた。ドンドン叩いていたがしばらくして静かに

なった。

早朝追い出された女が、ふたりの男、村長とその女の実父を連れて次郎宅の前に茫然と立っていた。村の若い衆が何かを家の中や周辺で捜している。「次郎はどこにもいませんよ」「畳の上に札と銭が散らばっています」「たいせつな笛がなくなっている」

そこに一人の六部が通りかかり鋭い目つきでジツと次郎の家を見た。急に風が家のほうから吹いた。六部は無言で家に入り、かまどや床、炬辺を丹念に調べ出した。「なにかありますか」と村長が訊ねると、「うむ、やはり鬼だろう。それも女鬼だ。山姥は臭いが、その臭いはない。・・・笛がなくなっているか。次郎は惚れられたな。泣いた赤鬼の女版かな」六部は声を立てずかく笑った。

「なぜおまえは次郎の腕を離さなかったのだ」と実父は娘にきいた。「あの大事な銭っこを取られてたまるか!」

村長に六部は呟いた。「鬼みたいな女という言葉は浅薄だ。今昔物語のむかしから、女は鬼より怖い正しい。怨念は鬼にはない」

